

精神科通院患者の造形活動における自己表現と他者との関わり

京都造形芸術大学 藤澤三佳

1 目的

1990年代後半以降、日本において、医療や福祉領域と、アート領域の交わるフィールドにおいて、「障害者のアート」「アウトサイダーアート」「アールブリュット」等の名称が用いられるようになり、特に最近では、日本における「2020年のオリンピック・パラリンピック開催にむけて障害者のアートも充実させよう」というかけ声のもとで、それらは、社会的にもますます注目を浴びる存在となっている。

また、同時に、それとは別の流れとして、1970年代以降、治療を目的とする行為として、医療的な場においては、芸術療法や作業療法もおこなわれてきている。

本報告の目的は、それらとは性格を異にし、医療の枠組みのように治療を目的としたり、アートの枠組みのように、よい作品を生み出すことを重視したりすることをめざす立場ではなく、当事者の自由な自己表現と、他者とのコミュニケーションを重視する活動を取りあげて、その意義を検討することである。

2 方法

本報告で用いるデータとしては、そのような自由な自己表現とコミュニケーションを44年間実践している指導者A氏が主催するH精神科病院造形教室の活動を取りあげて、報告者が過去数回にわたり、勤務大学においてこの造形教室と共に開催してきた展覧会時の映像記録を示す。

それらの映像資料に加えて、描かれるプロセス、表現者である当事者の作品及びことばを取りあげる。具体的な表現者の事例として、母親からの虐待の記憶を表現しているSさんや学校でのいじめられた体験や強迫性障害の症状を描くMさんを取りあげて、その生活史と表現の意味、描かれた絵を示す。これらの参与観察や生活史を中心とした聞き取り調査データの提示に関しては当事者の許可を得ている。

3 結果及び結論

本報告で取り上げた活動は、治療でもなく、作品だけの評価を重視するのではなく、造形教室メンバー間の関係や、また彼らと展覧会時における鑑賞者とのコミュニケーションを重視し、「作品ができるとともに周りの人との関係もつくられていく。(略)絵には時間的経過というか、関係とか、そういうものがつながってくる」とA氏が上記ギャラリートークにおいて語るように、外に開かれていく活動である。

これらの検討を通じて、大きいスティグマが付与されることも多い精神科通院患者が、表現することと他者との関係のなかで、そこから解放されて自己否定的ではない新しいアイデンティティをもつようになっていることを明らかにする。他者とのコミュニケーションを通じて自らを社会的に意義がある存在であるという意識、さらに弱さを逆バネとして精神科に関わるスティグマを社会に問い直すプロセスが芽生えていくことがわかる。

文献

荒井祐樹, 2013, 『生きていく絵』 亜紀書房.

藤澤三佳, 2014, 『生きづらさの自己表現～アートによってよみがえる「生」～』 晃洋書房.